

〈招待論文〉

ユーモア理解の「見だし」理論*

中 村 太戯留

武蔵野大学

Humor comprehension has been studied for a long time, but its mechanism has not yet reached a unified view. According to the incongruity resolution theory, humor comprehension is processed in phases. A neuroimaging study reported that, during incongruity resolution phase, the amygdala plays an important role in humor elicitation. Considering that another study reported the amygdala involvement in irony processing as well, “finding” what is related to human survival may be the key to understanding humor. Furthermore, in order for the result of “finding” to elicit humor, “protective frame” against the result must be functioning.

キーワード： ユーモア、皮肉、扁桃体、関連のある事柄、「保護されている」という認識の枠組み

1. はじめに

皮肉や比喩といった、語用論が研究対象とする現象からもユーモアが生じうることが知られている (Long and Graesser 1988; Mio and Graesser 1991)。

- (1) At a fashionable dinner, a dignified lady rebuked Winston Churchill. “Sir, you are drunk.” “Yes”, replied Churchill, “and you are ugly. But tomorrow I shall be sober and you shall still be ugly.” (Long and Graesser 1988: 42)

いかめしい婦人： 首相、あなたは酔っ払いすぎですよ！

チャーチル首相： ああその通り、俺は酔っ払いで、あなたはブサイクだ！

ただな、朝になれば俺はシラフになるが、あなたはブサイクなままだ！

- (1) は「皮肉と敵意 (Sarcasm and hostility; Long and Graesser 1988: 42)」の例であ

* 本稿は、JSPS 科研費 JP20K13034 の助成、自然科学研究機構生理学研究所生体機能イメージング共同利用実験の支援、そして武蔵野大学教養教育リサーチセンターの支援を受けた。ここに感謝の意を表す。

るが、その基本構造は、「いかめしい (dignified)」婦人に対して、その厳格な様子とは逆の「ブサイク (ugly)」という滑稽さを表す表現をしており、内容を文字通りの意味として解釈することが困難となっている。そのため、聞き手は解釈の調節を図らずも探してしまうというのが皮肉表現の作用と考えられる。そして、「話し手はありのままを誠実に語っている」という発話を捉える枠組みの間違ひを見だし、例えば、「話し手は皮肉を語っている」のように枠組み自体を調節することでユーモアを生じうると考えられる。

(2) My surgeon is a butcher among doctors. (Mio and Graesser 1991: 95)

私の担当の外科医は食肉解体業者 (みたいなもの) だ、医者としては。

(2) の基本構造は、「A は B だ」という隠喩 (比喩の下位カテゴリ) の形式となっており、内容を文字通りの意味として解釈することが困難となっている。「外科医 (surgeon)」も「食肉解体業者 (butcher)」も単独の単語としてはその内容を理解することができるのだが、「外科医」は「食肉解体業者」ではないため、文字通りの意味として理解することはできない。そのため、聞き手は「外科医」と「食肉解体業者」の関係性を図らずも探してしまうというのが比喩表現の作用と考えられる。そして新たな関係性として、例えば「外科医と食肉解体業者のどちらも肉を切る」という共通点を聞き手は見いだすことでユーモアを生じうると考えられる。また、「食肉解体業者」から「肉をぶつ切りにする」という連想を生じるならば、「腕の利く外科医ではなく、荒っぽい外科医」という意味も見いだすかもしれない。

すなわち、(1) の例に示すような皮肉表現では何らかの間違ひを見だしているのに対して、(2) の例に示すような比喩表現では何らかの新たな関係性を見だしているという特徴がみられる。そして、(1) と (2) のどちらの表現からもユーモアが生じうるということは、両者に何らかの共通点があると推測することができる。はたして、「間違ひ」と「新たな関係性」の間に共通点はあるのだろうか。

まともに考えると共通点を見いだすことは困難である。そこで、筆者が注目したのは、(1) と (2) のどちらも何らかの「見だし」をしているという共通点である。(1) の皮肉表現であれば「話し手はありのままを誠実に語っている」という発話を捉える枠組みの間違ひを「見だし」しており、(2) の比喩表現であれば「外科医と食肉解体業者のどちらも肉を切る」という新たな関係性を「見だし」している。見方を変えれば、(1) の皮肉表現と (2) の比喩表現が共通に提供しているのは「見だし」を促すための言語的な仕掛けであり、一方、相違点はその具体的な対象 (間違ひ、新たな関係性) と捉えることができる。では、「見だし」をした際には必ずユーモアを生じるのだろうか。

「見だし」をした際にユーモアを「生じうる」のだが、必ずしもユーモアを生じるわけではない。仮に (1) の聞き手が自身の見た目を気に病んでいるとするならばユーモアは生じないであろうし、仮に (2) の聞き手が「荒っぽい外科医」の被害者であるとするなら

ばユーモアは生じないと考えられる。すなわち、ユーモアを生じる際には、「見いだし」をした際に、聞き手自身は (1) や (2) で語られていることから「『保護されている』という認識の枠組み (protective frame)」(Apter 1992, 2007) を有していることが重要な要因と考えられる。

本稿では、「見いだし」および「『保護されている』という認識の枠組み」からユーモア理解について考察し、ユーモア理解の「見いだし」理論の構成を試みる。

2. ユーモアに関する理論

ユーモアに関しては古くから研究されているが、いまだに統一見解には至っていないというのが現状である。ユーモアに関する理論は、「優越理論」、「エネルギー理論」、そして「不調和解消理論」に区別することができる (Martin 2007; 雨宮 2016)。

2.1. 優越理論

優越理論 (Hobbes 1840) は、他人の劣る側面や、過去の自分の劣る側面が明るみに出ること、相対的に現在の自分が突然の栄誉を享受する、という要因の重要性を指摘している。本稿では、優越理論として総称しているが、「劣る側面」に焦点を当てた理論は、非難理論、攻撃性理論、価値低下理論などと呼ばれてきた (Martin 2007)。

前記の (1) の例を、仮に優越理論的に説明するならば、「いかめしい婦人をブサイク」と評して非難し、攻撃し、そしてその婦人の価値を低下させることで、その話し手やそのやりとりを周りで傍観している聞き手が相対的に優位な立場に立ち、突然の栄誉を享受する、という説明が可能かもしれない。また、(2) の例であれば、外科医を食肉解体業者に喩えることにより、外科医の価値を低下させることで、聞き手が相対的に優位な立場に立ち、突然の栄誉を享受する、という説明が可能かもしれない。しかし、現在の自分が、他人や過去の自分よりも優位な立場であったとしても、必ずしもユーモアが生じるわけではない。例えば、社長から「今日からあなたが係長です」と平社員仲間の中で自分が言われた場合、突然の栄誉を享受しているのだが、このような状況においてユーモアは生じるだろうか。ユーモアが生じることは考えにくく、生じるためには、もう少し別の観点から条件などを追加する必要があるように思われる。

2.2. エネルギー理論

エネルギー理論 (Spencer 1859; Freud 1905) は、特に性的あるいは暴力的な余剰な神経エネルギーの放出、という要因の重要性を指摘している。18 世紀後半から 19 世紀にかけて起こった産業革命の頃に「エネルギー」の概念が発見されると、心的エネルギーを想定した理論的アプローチが活発になり、(心的エネルギーの) 放出理論 (Spencer 1859;

Freud 1905) が提案されてきた。

前記の (1) の例を、仮にエネルギー理論的に説明するならば、「あなたはブサイクだ」という言葉の暴力を用いることで、普段は抑圧されている暴力的なエネルギーが放出される、という説明が可能かもしれない。また、(2) の例であれば、「食肉解体業者」から連想させる「肉をぶつ切りにする」というような暴力的な連想によって、普段は抑圧されている暴力的なエネルギーが放出される、という説明が可能かもしれない。また、性的な内容を連想させるような表現であれば、普段は抑圧されている性的なエネルギーが放出される、という説明は納得性が高いと感じられる。しかし、聞き手が仮に暴力的行為や性的行為に関して過去に被害にあっていたとしてユーモアは生じるだろうか。ユーモアが生じることは考えにくく、生じるためには、もう少し別の観点から条件などを追加する必要があると考えられる。

反転理論 (Apter 1982) は、心的エネルギーが高い状態なのか低い状態なのかという要因に加えて、その心的エネルギーを捉える心の枠組みが真面目状態 (telic mode) なのか遊び状態 (paratelic mode) なのかという要因を提案している。心的エネルギーが高い状態の際に、真面目状態であれば不安 (anxiety) となるのに対して、遊び状態であれば興奮 (excitement) となる。一方、心的エネルギーが低い状態の際に、真面目状態であればリラックス (relaxation) となるのに対して、遊び状態であれば退屈 (boredom) となる。快 (pleasant) の状態は興奮とリラックスが該当し、不快 (unpleasant) の状態は不安と退屈が該当している。これらの組み合わせのうち、心的エネルギーが高くて遊び状態の場合にユーモアが生じうると考えられる。では、どのような状態の際に遊び状態となり、どのような状態の際に真面目状態となるのであろうか。

反転理論 (Apter 1992, 2007) では、聞き手が「『保護されている』という認識の枠組み」を有していることが、遊び状態となる重要な要因であると提案している。そのため、心的エネルギーが高く、「『保護されている』という認識の枠組み」を有していることがユーモアを生じうる重要な条件と考えられる。この概念装置は、後述するユーモア理解の「見だし」理論の骨格として機能している。前記の (1) や (2) の例であれば、聞き手が「保護されている」という認識の枠組みを有していれば、抑圧された暴力的ないし性的なエネルギーの放出の際にユーモアを生じうるが、その枠組みを有していない場合 (例えば、暴力的行為や性的行為などの被害にあった場合) にはユーモアを生じないという説明が可能となる。

2.3. 不調和解消理論

不調和解消理論 (Suls 1972; Forabosco 1992; Attardo et al. 2002) は、ユーモア理解における段階的な処理の関与を提案している。まず、いつもと違う何か (Forabosco 1992) や曖昧で不調和な何か (Attardo et al. 2002) として不調和を感知する。次に、そ

のギャップを埋める新たな関係性を見いだしたり (Mio and Graesser 1991; Hillson and Martin 1994)、思い込みの間違いを見いだしたり (Hurley et al. 2011) して不調和を解消する。この不調和の解消段階においてユーモアが生じうると考えられる。この概念装置は、後述するユーモア理解の「見だし」理論の骨格として機能している。

例えば、前記の(1)の例を、不調和解消理論的に説明するならば以下のようなになる。「いかめしい婦人」に対して「あなたはブサイクだ」という発話をしていることから、いつもと違う何かとして不調和を感知し、その不調和を解消する処理を開始する。そして、例えば、「話し手はありのままを誠実に語っている」という発話を捉える枠組みの間違いを見だし、例えば、「話し手は皮肉を語っている」のように枠組み自体を調節することで不調和を解消する。また、(2)の例であれば、「外科医」は文字通りの意味として「食肉解体業者」ではないため、曖昧な何かとして不調和を感知し、その不調和を解消する処理を開始する。そして、例えば、「外科医と食肉解体業者のどちらも肉を切る」という共通点を見出すことで不調和を解消する。しかし、不調和を解消したとしても、必ずしもユーモアが生じるわけではない。例えば、資格試験の問題が解けない状態は不調和の感知段階であるが、その問題が解けて不調和が解消したとして、ユーモアは生じるだろうか。ユーモアが生じることは考えにくく、生じるためには、もう少し別の観点から条件などを追加する必要があると考えられる。筆者は、前記の反転理論 (Apter 1992, 2007) が提案する、聞き手が「『保護されている』という認識の枠組み」を有していることがその重要な条件であると考えている。

不調和解消理論の中には、解消段階は不要とする主張もある (Nerhardt 1970, 1976)。その場合は、単に不調和理論と称するのが適切かもしれない。実験参加者は精神物理学の実験に参加すると案内のもとに参加しており、2つの重りの重さを順に比較していくという課題を実施している。初めは基準の重りとほとんど重さの変わらない重りの比較を実施し、突然、非常に軽い重りや、非常に重い重りとの比較を実施した際に、実験参加者が微笑んだり、くすくす笑ったり、時には大声を出して笑ったりしたことを報告している (Nerhardt 1970)。わずかな重さの違いの判断を求めるという文脈において、あからさまな重さの違いの判断を突然求められることは不調和である。この不調和は一見すると何も解消されていないように見えるため、解消段階は不要 (Nerhardt 1970) と主張しているのだが本当だろうか。この点は後述する。この実験は実験室で実施したのだが、別の実験として実験室を離れて鉄道の駅で実施するとその笑いは消失したことも報告している (Nerhardt 1976)。この2つの結果の相違は、おそらく反転理論 (Apter 1992, 2007) の提案が関係しており、前者 (Nerhardt 1970) は「保護されている」という認識の枠組みを有しており遊び状態になったのに対して、後者 (Nerhardt 1976) はその枠組みが機能せずに真面目状態であったと推測することができ、反転理論の提案を支持する好例のように見える。

3. ユーモアの「見だし」理論

ユーモアを生じるのは、不調和解消理論 (Suls 1972; Forabosco 1992; Attardo et al. 2002) が提案する段階的な処理のうち、不調和の解消段階と考えられる。しかし、ユーモア理解の神経基盤に関する先行研究においては多様な神経基盤が提案されているが、解消段階に特有な神経基盤がいずれであるかは統一見解に至っていない (Vrticka et al. 2013)。

3.1. ユーモア理解に関する多様な神経基盤

ユーモア理解の神経基盤に関する先行研究に対して、メタ分析を実施した結果によれば、脳のほぼ全ての領域が賦活しており、左右差は有意ではないことが報告されている (Nakamura et al. 2018)。大脳皮質の外側領域の報告部位は前から順に、前頭極、前頭前野背外側部、上前頭回、中前頭回、下前頭回、島皮質、側頭極、上側頭回、上側頭溝、中側頭回、下側頭回、上頭頂小葉、下頭頂小葉、側頭頭頂接合部、側頭後頭接合部、紡錘状回、そして外側後頭葉であった。内側領域は前から順に、眼窩前頭皮質、腹内側前頭前野、内側前頭前野前部、内側前頭前野後部、中心前回および中心後回、後帯状皮質、楔前部、そして内側後頭葉であった。そして皮質下領域は、扁桃体、背側線条体、腹側線条体、視床下部、視床、海馬傍回、海馬、中脳、そして小脳であった。なかでも、下前頭回、中側頭回、そして扁桃体の賦活頻度は 50~60% であり、その他の部位の賦活頻度が 35% 未満であるのに対して有意に高い結果であることが報告されている (Nakamura et al. 2018)。

賦活頻度の高い下前頭回は、音韻処理、文法処理、そして意味処理に関与することが多数報告されており、ブロードマンの脳地図の 44 野は音韻処理、45 野と 44 野は文法処理、そして 47 野と 45 野は意味処理に関与すると考えられている (Hagoort 2005)。一方、中側頭回は、物やその属性に関する概念情報の蓄積をおこなっていると考えられている (Damasio et al. 1996)。すなわち、下前頭回と中側頭回は汎用的な言語処理を担っているため賦活頻度が高いと考えると先行研究の知見と整合する。賦活頻度の高い部位のうち、下前頭回と中側頭回を除くと、残る扁桃体がユーモア処理に特有の重要な役割を担っている可能性が考えられる。

3.2. 不調和の解消：関連の「見だし」

賦活頻度の高い扁桃体は、危険を速やかに自動的に感知して避けるための機構であると一般的には考えられているが、ポジティブ情動とネガティブ情動のどちらの感知にも関与することから、より大きな目的として生物学的な刺激の入力に対する情動的な評価に関与すると考えられている (Sander et al. 2003)。本稿ではこれを「関連 (relevance)」(Sand-

er et al. 2003) と表記し、「関連性 (relevance)」(Sperber and Wilson 1995) と混同のないように区別する。関連に関しては、「ある事柄が、自分の目標達成、自分の欲求実現、自分が有する幸福や属する種の幸福の維持に (ポジティブであれネガティブであれ) 有意な影響を及ぼすならば、それは関連のある事柄である (an event is relevant for an organism if it can significantly influence (positively or negatively) the attainment of his or her goals, the satisfaction of his or her needs, the maintenance of his or her own well-being, and the well-being of his or her species)」(Sander et al. 2003: 311) と考えられている。このヒトの生存と関連のある事柄の「見だし」に関与すると考えられる部位は他にもあり、帯状回の前部はものの生物学的な価値の算定、島皮質の前部は情動反応、眼窩前頭野は感情価の区別、そして上丘や下丘や視床枕は無関係な刺激の除去に関与すると考えられている一方で、扁桃体は他の部位への出力投射の数が圧倒的に多いことから特に重要な役割を果たしていると考えられている (Pessoa and Adolphs 2010)。その多数の出力投射により皮質ネットワークの機能を調和させることに関与すると考えられている (Pessoa and Adolphs 2010)。また、扁桃体の社会的機能としては、社会的に目立つ刺激の認知とそれに対する反応 (Whalen and Phelps 2009)、一見すると明示的ではない隠れた敵意や社会的な脅威などの感知 (Sander et al. 2003) が報告されている。これらから、扁桃体はユーモア処理における不調和の解消において重要な役割を果たす神経基盤であると考えられる。

不調和の解消段階に特有な神経基盤が不明なのは、不調和の感知段階と解消段階とが連続して生じており、両段階を分離する明確な行動的な指標が存在しないことに起因する (Vrticka et al. 2013)。そのため、不調和の感知段階の直後にユーモア理解の処理を一時停止することにより、不調和の解消段階を排他的に焦点化する実験デザインを用いた検討が必要となる (Nakamura et al. 2018)。

(3) Stage 1: Given the concept of “savings”

Stage 2: I’d say “my wife’s smile”

Stage 3: Do you know why they are similar?

Stage 4: Because if they disappear, I will be in trouble.

(Nakamura et al. 2018: 555)

時点 1: 貯金と掛けて

時点 2: 奥さんの笑顔と解く

時点 3: その心は?

時点 4: なくなると怖い!

(3) の「なぞかけ」は 4 つの時点に分けて逐次的に提示しているが、構造的には典型的な隠喩形式である「貯金は奥さんの笑顔だ」と等価となっている。すなわち、貯金は文字

通りに奥さんの笑顔ではないため、字義的な解釈は破綻しており、一方で新たな関係性を見いだすこともできない状態となる。すなわち、「その心は？」と問いかけをした時点3では、不調和の感知段階の直後にユーモア理解の処理を一時停止した状態となる。そして、「なくなると怖い！」が提示された時点4では、「貯金」と「奥さんの笑顔」の新たな関係性を見いだし、不調和の解消段階のみが生じた状態となる。

(4) Stage 1: Given the concept of “savings”

Stage 2: I’d say “a credit card”

Stage 3: Do you know why they are similar?

Stage 4: Because if they disappear, I will be in trouble.

(Nakamura et al. 2018: 556)

時点1： 貯金と掛けて

時点2： クレジットカードと解く

時点3： その心は？

時点4： なくなると怖い！

(4) は、(3) の2文目を変更し、「貯金」と類似した「クレジットカード」を並べて両者の類似点を見いだしやすくして面白さを低減した表現である。(3) の「なくなると怖い！」では多くの実験参加者は「面白い」と判断するのに対して、(4) の「なくなると怖い！」では多くの実験参加者は「面白くない」と判断することが期待される。そのため、(3) の時点4の「なくなると怖い！」の際の脳活動から、(4) の時点4の「なくなると怖い！」の際の脳活動を引き算した残りとして不調和の解消段階特有の脳活動のみを抽出できると期待できるというのが実験デザイン (Nakamura et al. 2018) の骨子である。すなわち、(3) と (4) のどちらでも「なくなると怖い！」という全く同じ刺激を提示しているため、汎用的な言語処理に関与すると思われる下前頭回と中側頭回の賦活は引き算により消失し、不調和の解消段階に特有の脳活動のみが残ると期待される。

このような刺激ペアを複数個用意し、複数人の実験参加者に提示して解析したところ、左扁桃体のみが賦活したことが報告されている (Nakamura et al. 2018)。このことから、何らかの新たな関係性を「見いだす」際に、扁桃体が重要な役割を果たすことが示唆される。なお、皮肉理解に特有な神経基盤としても扁桃体の賦活が報告されており (Uchiyama et al. 2012)、何らかの間違いを「見いだす」際にも、扁桃体が重要な役割を果たすことが示唆される。このことは、前記の (1) の皮肉的表現や (2) の比喩的表現のどちらからもユーモアは生じうるという見解と整合する。扁桃体が、ヒトの生存と関連のある事柄の「見いだし」において重要な役割を果たすという見解 (Sander et al. 2003) を考慮し、ユーモア理解の「見いだし」理論では、ヒトの生存と関連のある事柄の「見いだし」がユーモアを生じる必要条件であると位置づける。前述の優越理論の優位な立場や、エネルギー理

論の暴力的ないし性的なエネルギーは、「ヒトの生存と関連のある事柄」と捉えられるため、「見だし」理論の見解と整合する。

扁桃体が不調和の解消段階に特有な神経基盤であるとするならば、前記のメタ分析で列挙した扁桃体以外の神経基盤が不調和の感知段階ないし汎用的な言語処理に関与する神経基盤と推定される。すなわち、不調和の感知は言語処理が対象とするあらゆる場面で生じうると推測することができる。例えば、紡錘状回は物の視覚的な属性に関する内的知識の検索に (Thompson-Schill et al. 1999)、海馬傍回は外側の意味記憶と内側のエピソード記憶の仲介をしている可能性が示唆されている (Levy et al. 2004)。背内側前頭前野は、動き、注意、動機づけの制御に関与しており (Damasio 1981)、前方はメンタライジング (mentalizing)、後方は不整合や間違いの感知に関与すると考えられている (Amodio and Frith 2006)。腹内側前頭前野は、動機づけ、感情、報酬の処理に関与しており、概念の情動的側面の処理の重要な役割を担っていると考えられている (Amodio and Frith 2006)。後帯状皮質は、エピソード記憶や空間視覚に関する記憶に関与しており、未来の行動の参考とするために過去の経験の記録をしている可能性が示唆されている (Vincent et al. 2006)。

3.3. 不調和の感知：発話の意味と発話者の意味の区別

このように、不調和の感知は、言語処理が対象とするあらゆる場面で生じうるため、本稿では「意味づけ論」(深谷・田中 1996; 田中・深谷 1998) が提案する「発話の意味」と「発話者の意味」を区別し、体系的に不調和の感知対象を捉えることを試みる。また、発話の意味を構成するためには「対象把握」と「内容把握」が必要であり、一方で発話者の意味を構成するためには「意図把握」「態度把握」そして「表情把握」が必要であり、合計で5つの把握の相が関与すると考えられている。すなわち、不調和の感知は、これらの把握の相のどこでも生じうると考えることができる。なお、意味づけ論の用語として、「情況」はある個人が既存の内的知識として有している意味世界、「コトバ」はその個人に向けられた言語的な外的情報(空気の振動やインクのシミ)を指すことを予め付記する(深谷・田中 1996; 田中・深谷 1998)。

3.3.1. 発話の意味

前記の(2)のような比喩とは、語用論が研究対象とする現象であるが、これは「発話の意味」に属する現象である。比喩のうち、換喩 (metonymy) は対象把握の相を調節することによりその不調和を解消する現象であり、隠喩 (metaphor) は感知した不調和に対して内容把握の相を調節することによりその不調和を解消する現象である。

対象把握を、意味づけ論では、「コトバが何を指しているのかを意味づける相」(深谷・田中 1996: 82) と定義している。例えば、「白バイに捕まった」という換喩を聞いた場合、

白バイという乗り物はヒトを捕まえないため対象把握の相で不調和を感知することになる。そして、例えば「白バイ」と隣接関係にある「白バイに乗った警察官」に対象を調節することで不調和を解消する。また、前記の(1)の「ああその通り、俺は酔っ払いで、あなたはブサイクだ！」の「あなた」の部分が何を指しているのかを特定する相が対象把握に該当する。いかめしい婦人の「首相、あなたは酔っ払いすぎですよ！」という指摘に対する応答という文脈であれば、「あなた」は「いかめしい婦人」を指すと解するのが素直な解釈である。ここで注意する必要があるのは、意味づけ論でも指摘されているように、ある名詞が指す対象は文脈を考慮することによって定まるため、「対象把握を独自に議論することは適切ではない」(深谷・田中 1996: 84)点である。一方、(2)の「私の担当の外科医は食肉解体業者だ、医者としては。」の「外科医」の部分、そして「食肉解体業者」や「医者」の部分が何を指しているのかを特定するのは比較的容易だが内容把握の相の調節が必要となる。そのため、対象把握は、内容把握と独立ではなく、内容把握との関係で考える必要がある。

内容把握を、意味づけ論では、「コトバがどういう内容をいっているのか(叙述内容)を意味づけ、コトバから語られた事態を構成する相」(深谷・田中 1996: 82)と定義している。例えば、前記の(1)の「ああその通り、俺は酔っ払いで、あなたはブサイクだ！」であれば、対象把握の相で「あなた」が「いかめしい婦人」であると特定し、「ブサイク」という属性を有しているという内容を把握することができる。一方、(2)の「私の担当の外科医は食肉解体業者だ、医者としては。」では、対象把握の相で「外科医」「食肉解体業者」そして「医者」は特定できるものの、「外科医」は文字通りの意味としての「食肉解体業者」ではないため、内容把握の相で不調和を感知することとなる。そして、例えば、「外科医と食肉解体業者のどちらも肉を切る」という共通点を見いだすことで不調和を解消する。また、「食肉解体業者」から「肉をぶつ切りにする」という連想を生じるならば、「腕の利く外科医ではなく、荒っぽい外科医」という内容把握をするかもしれない。そして、なんとなくこの外科医の価値を低下させる「見劣り効果」(Wyer and Collins 1992)が、ユーモアの生起に関与している可能性も考えられる。

3.3.2. 発話者の意味

前記の(1)のような皮肉とは、語用論が研究対象とする現象であるが、これは「発話者の意味」に属する現象である。皮肉は感知した不調和に対して、態度把握(発話態度の把握)の相を調節することによりその不調和を解消する現象である。皮肉を意図した発話は、多くの場合、発話の意味における不調和を含まず、字義的な解釈が可能である。例えば、ラグビーで惨敗した選手が「もう少して勝てたのに」と言ったのに対して、話し相手が「もう少して勝てた」と復唱したとする。その場合当然、その復唱を、いつもと変わらぬ様子で(表情把握の相)、優しい嘘として励ますことを意図して(意図把握の相)、誠実

に語っている（態度把握の相）、と理解することも可能である。仮に聞き手がこのように理解した際には、話し手が内心は批判を意図していたとしても、その批判的な意図は伝わらないことになる。

意図把握を、意味づけ論では、「ある発話によって、発話者は何をしたいのか、あるいは何をして欲しいのかを捉える意味の相」（深谷・田中 1996: 84）と定義している。例えば、前記の(1)の「ああその通り、俺は酔っ払いで、あなたはブサイクだ！」であれば、「あなた」に対して嫌みを言いたい、周りの人々を「笑わせたい」などの意図把握をすることが可能である。また、(2)の「私の担当の外科医は食肉解体業者だ、医者としては。」では、聞き手や読み手を「笑わせたい」などの意図把握をすることが可能である。意味づけ論によれば、「行為意図には、脅す、提案する、要請する、責任逃れをする、褒めてもらいたい、など多種多様な意図が含まれる」（深谷・田中 1996: 84）としており、例えば、「相手は自分をからかおうとしている」や「相手は自分を笑わせようとしている」などの意図を見いだすことによりユーモアを生じうると考えられる。

態度把握（発話態度の把握）を、意味づけ論では、「発話者が話題となっている状況をどういう態度で語っているかを捉える意味づけ（の相）」（深谷・田中 1996: 84）と定義している。通常は、相手の発話を「感じたまま、思ったままを、ありのままに誠実にコトバで表現する」（深谷・田中 1996: 84）という捉えかたをしているが、例えば、前記の(1)の「ああその通り、俺は酔っ払いで、あなたはブサイクだ！」という発話を聞いて不調和を感知した際に、この発話態度の把握の相を調節して「相手は皮肉として語っている」あるいは「相手は嫌みとして語っている」という枠組みで捉えなおすことで不調和を解消してユーモアを生じうると考えられる。反転理論（Apter 1982）が提案している「枠組み」としての「真面目状態」から「遊び状態」への調節は、この発話態度の把握の相の調節に該当すると考えられる。意味づけ論では、発話態度かどうかを判別するために、操作定義（深谷・田中 1996: 85）として、「ある発話をメタ的に言及しラベル化（フレーム化）できること」と「『～をいう』を用いた叙述のしかたが可能であること」の2点を満たす必要があると述べている。これに該当する事例としては、皮肉、冗談、嘘、はったり、などが挙げられる。

表情把握を、意味づけ論では、「この人は、不安を感じている、喜んで、威張っている、落ち着いている、といった雰囲気や様子や印象を、相手の動作や声の韻律などを手掛かりにしながら感得し、理解すること（の相）」（深谷・田中 1996: 85）と定義している。例えば、前記の(1)の「ああその通り、俺は酔っ払いで、あなたはブサイクだ！」と笑顔で明るい声で言った場合にはユーモアを生じうるが、暗い表情で悲しそうな声で言った場合には結果は異なってくるのが予想される。

3.3.3. 行為の意味と行為者の意味

前記の重さ判断パラダイム (Nerhardt 1970, 1976) の例では、不調和理論に解消は必ずしも必要ないと結論づけているがそうだろうか。意味づけ論 (深谷・田中 1996; 田中・深谷 1998) では、不調和解消の対象として、「発話」の意味と「発話者」の意味 (枠組み要因) を挙げている。重さ判断パラダイムでは「発話」は関与しないため、「行為」と読み替えて考えてみると、相手が要求した「行為」の意味と、その行為を要求した「行為者」の意味 (枠組み要因) が介在すると考えられる。もともとは態度把握の相で「誠実に実験参加を依頼している」と捉えていたのに対して、あからさまに重さの違う比較をさせるのは不自然であると感じる (不調和の感知)。そして、「誠実に実験参加を依頼している」と捉えている枠組み自体が誤りであることを「見だし」、例えば、態度把握の相を「相手は自分をからかおうとしている」に調節することで不調和の解消を図っていると捉えることが可能である。すなわち、発話や行為の枠組み要因を導入することで、より包括的な説明が可能になると期待される。

3.4. 「保護されている」という認識の枠組み

ユーモア理解の「見だし」理論では、ヒトの生存と関連のある事柄の「見だし」がユーモアを生じる必要条件と位置づけたのに対して、十分条件として本稿では「反転理論」 (Apter 1992, 2007) が提案する『「保護されている」という認識の枠組み』の導入を試みる。例えば、「ライオンが目の前にいる」という状況は、自分自身が食べられてしまうかもしれないため、「ヒト (自分) の生存と関連のある事柄」としてその状況を「見だし」と考えられる。このままの状況は恐怖であり、ユーモアが生じることはないのだが、十分に頑丈な檻の中にいるとするならば、「保護されている」という認識の枠組みが生じ、ユーモア (笑い) が生じると考えられる。また、この枠組みの下位分類として、「自信枠組み」「安全枠組み」そして「分離枠組み」の3つの枠組みが関与すると考えられている (Apter 1992, 2007)。

3.4.1. 自信枠組み

自信枠組み (confidence type of protective frame) を、反転理論では、「自分が、危険が差し迫っていることに気づいていながらも、トラウマ (強い精神的なショックや恐怖体験が原因となった心の傷) を避けられるという認識の枠組み (The individual feels confident that he or she will avoid trauma, despite an awareness of the immediate presence of danger.)」 (Apter 2007: 77) と定義している。前述の「ライオンが目の前にいる」という状況は、自分自身が食べられてしまうかもしれないため、このままの状況は恐怖なのだが、例えば、自分が十分に強くて、そのライオンを倒す自信がある場合には、「保護されている」という認識の枠組みが生じ、おそらくはニヤッと笑うタイプのユーモアが生じる

のではないだろうか。前記の(1)で、いかめしい婦人が、十分に弁が立ちチャーチル首相の毒舌をねじ伏せる自信がある場合には、自信枠組みが機能すると考えられる。その場合、例えば、「ご高齢の首相が、明日の朝無事に目覚めることができれば、の話ですがね」などと切り替えしてニヤッと笑うなどの展開が想像される。また、(2)で、「私の担当の外科医は食肉解体業者だ、医者としては。」の聞き手が、どんな難しい手術でも確実に成功させる自信がある外科医であった場合には、自信枠組みが機能すると考えられる。その場合、例えば、「私の店に来てください。素晴らしい一皿に料理して差し上げますよ。」などと発話してニヤッと笑うなどの展開が想像される。

3.4.2. 安全枠組み

安全枠組み (safety-zone type of protective frame) を、反転理論では、「自分が、既に危険だったり、やがて危険に陥る可能性があったりはしないという認識の枠組み (The individual feels that there is no immediate danger or possibility of slipping into danger.)」(Apter 2007: 77) と定義している。前述の「ライオンが目の前にいる」という状況だが、例えば、そのライオンが十分に頑丈な檻の中にいる場合には、「保護されている」という認識の枠組みが生じ、おそらくは見下すように笑うタイプのユーモア (優越理論が想定する、優位な立場に立ち、突然の榮譽を享受するような笑い) が生じるのではないだろうか。前記の(1)で、周りの参加者で、チャーチル首相の毒舌の矛先になっていない場合には、安全枠組みが機能すると考えられる。その場合、例えば、「あのご婦人、首相にやり込められてるね」と心の中で見下すように笑うなどの展開が想像される。また、(2)で、「私の担当の外科医は食肉解体業者だ、医者としては。」の聞き手が、既に自分の手術が別の外科医により無事に終わった患者の場合には、安全枠組みが機能すると考えられる。その場合、例えば、「自分が被害者でなくてよかった」と心の中で見下すように笑うなどの展開が想像される。

3.4.3. 分離枠組み

分離枠組み (detachment type of protective frame) に関して、現実世界から自分の認識を分離することで「保護されている」という認識の枠組みが生じるのだが、更に下位分類として、「自己代用」「空想」そして「追憶」の3つの心理的な処理が関与すると考えられている (Apter 1992, 2007)。

自己代用 (self-substitution) という分離枠組み内の心理的処理を、反転理論では、「危険にさらされているのは、(実際には自分なのだが) 自分以外の誰かだ」という認識の枠組み (Someone else is perceived to be in danger.) (Apter 2007: 77) と定義している。前述の「ライオンが目の前にいる」という状況は、自分自身が食べられてしまうかもしれないため、このままの状況は恐怖なのだが、どうすることも出来ない絶望的な状況であれ

ば、例えば、「エヘヘヘ」と笑ってごまかすという方法が残されている。これは「笑いのハイエナ理論」(河合・南 2008)とも呼ばれているもので、ライオンの食べ残しをハイエナがあさっているところに、ライオンが続きを食べようと戻ってきて、ライオンに見つかったハイエナが「エヘヘヘ」と笑ってごまかす(ように聞こえる声を出す)ことから、このように呼ばれている。すなわち、現実世界から自分の意識を分離して、危険にさらされているのは自分以外の誰かだと捉えることで「保護されている」という認識の枠組みが生じ(自己客観化; 河合・南 2008)、おそらくは自虐的に笑うタイプのユーモアが生じるのではないだろうか。前記の(1)で、いかめしい婦人が追い詰められて何も反撃できない場合には、例えば、自己代用(自己客観化)により分離枠組みが機能すると考えられる。また、(2)で、「私の担当の外科医は食肉解体業者だ、医者としては。」の聞き手が、例えば、既に手術台の上に乗っている状態で患者仲間から聞いた場合には、自己代用(自己客観化)による分離枠組みが機能すると考えられる。

空想(make-believe)という分離枠組み内の心理的処理を、反転理論では、「危険は架空のものだという認識の枠組み(The danger is perceived to be imaginary.)」(Apter 2007: 77)と定義している。前述の「ライオンが目の前にいる」という状況を例にとると、実際には自分の部屋にいたのだが、ゲームの世界や本の世界でライオンが目の前にいる場合には、「保護されている」という認識の枠組みが生じ、それにより疑似的に危険を愉しめるのではないだろうか。同様に、前記の(1)や(2)を本に記載された内容として読んでいる場合には、空想による分離枠組みが機能すると考えられる。

追憶(retrospection)という分離枠組み内の心理的処理を、反転理論では、「危険は過去に生じたものだ」という認識の枠組み(The danger is perceived to be in the past.)」(Apter 2007: 77)と定義している。前述の「(過去に)ライオンが目の前にいる」というケースであれば、例えば、現在は安全に自分の部屋にいる場合には、「保護されている」という認識の枠組みが生じると考えられる。過去の危機的な状況に対して、例えば、その時はたまたまゾウの群れが現れてライオンが逃げたため、九死に一生を得た場合、追憶による分離枠組みが機能し、過去の危険を武勇伝のように愉しむのではないだろうか。前記の(1)であれば、いかめしい婦人が数年後に思い返す場合や、(2)であれば、その外科医の手術から無事に生還した患者が数年後に思い返す場合には、追憶による分離枠組みが機能すると考えられる。

4. おわりに

本稿では、皮肉や比喩といった、語用論が研究対象とする現象からもユーモアが生じうること(Long and Graesser 1988; Mio and Graesser 1991)を手掛かりとした考察を通じて、以下のようなユーモア理解の「見いだし」理論の提案をした。

ユーモア理解の「見いだし」理論の骨格としては、不調和解消理論 (Suls 1972) が提案する段階的な処理、すなわち不調和の感知段階と解消段階を経ると考える。なお、ヒトの脳内の処理として両段階が逐次処理なのか並列処理なのかは不明である。また、不調和の解消段階は不要とする主張 (Nerhardt 1970, 1976) に対しては、意味づけ論 (深谷・田中 1996; 田中・深谷 1998) の提案する発話の意味と発話者の意味を発展的に継承し、行為の意味と行為者の意味を区別することにより、行為者の意味の不調和解消として解釈可能であることを確認した。

ユーモア理解の「見いだし」理論における、ユーモアを生じる必要条件としては、ユーモア理解の神経基盤に関する研究 (Nakamura et al. 2018) が提案する、「ヒトの生存と関連のある事柄」(Sander et al. 2003) の「見いだし」が重要であると考えられる。そして、この「見いだし」をした状態が、反転理論 (Apter 1982) の提案する心的エネルギーが高い状態に相当すると考える。また、語用論が研究対象とする皮肉という現象は、発話者の意味 (深谷・田中 1996; 田中・深谷 1998) に関する「間違い」の「見いだし」と捉えられる。一方、比喩という現象は、発話の意味 (深谷・田中 1996; 田中・深谷 1998) に関する「新たな関係性」の「見いだし」と捉えられる。

ユーモア理解の「見いだし」理論における、ユーモアを生じる十分条件としては、反転理論 (Apter 1992, 2007) が提案する、聞き手が「『保護されている』という認識の枠組み」を有していることが重要であると考えられる。すなわち、もし保護されていなければ、「ヒトの生存と関連のある事柄」(Sander et al. 2003) は、笑い事では済まされない。ただ、「『保護されている』という認識の枠組み」の下位分類として、「自信枠組み」「安全枠組み」そして「分離枠組み」が提案されており、分離枠組みのうちの自己代用という心理的処理 (Apter 1992, 2007) では、自己客観化 (河合・南 2008) により認識のみ現実世界から逃れることでユーモアを生じうることも指摘されている。

残された課題としては、ユーモア理解において、「ヒトの生存と関連のある事柄」(Sander et al. 2003) の「見いだし」と、「『保護されている』という認識の枠組み」(Apter 1992, 2007) の関係を、言語学、心理学、そして神経科学の力を借りて精緻化していくことが、今後の重要な研究として挙げられる。特に、「『保護されている』という認識の枠組み」(Apter 1992, 2007) の神経基盤の特定は興味深い研究課題である。また、本稿では不調和の解消段階に焦点を当てているが、不調和の感知段階 (谷 2004) についても言語学、心理学、そして神経科学の観点からの精緻化が必要である。

参考文献

- 雨宮俊彦. 2016. 『笑いとうもあ心理学：何が可笑しいの?』京都：ミネルヴァ書房。
Amodio, D. M. and C. D. Frith. 2006. "Meeting of Minds: The Medial Frontal Cortex and

- Social Cognition.” *Nature Reviews Neuroscience*, 7, 268-277.
- Apter, M. J. 1982. *The Experience of Motivation: The Theory of Psychological Reversals*. New York: Academic Press.
- Apter, M. J. 1992. *The Dangerous Edge: The Psychology of Excitement*. New York: The Free Press.
- Apter, M. J. 2007. *Danger: Our Quest for Excitement*. Oxford: Oneworld.
- Attardo, S., C. F. Hempelmann, and S. Di Maio. 2002. “Script Oppositions and Logical Mechanisms: Modeling Incongruities and their Resolutions.” *Humor*, 15(1), 3-46.
- Damasio, H. 1981. “Cerebral Localization of the Aphasias.” In Sarno, M.T., (ed.), *Acquired aphasia*, 27-50. Orlando: Academic Press.
- Damasio, H., Grabowski, T.J., Tranel, D., R.D. Hichwa, and A.R. Damasio. 1996. “A Neural Basis for Lexical Retrieval.” *Nature*, 380(6574), 499-505.
- Forabosco, G. 1992. “Cognitive Aspects of the Humor Process: The Concept of Incongruity.” *Humor*, 5(1), 45-68.
- Freud, S. 1905. “Der Witz und seine Beziehung zum Unbewußten.” Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch-Verlag. (懸田克躬 [訳]. 1970. 「機知：その無意識との関係」『フロイト著作集 4』、237-421、京都：人文書院.)
- 深谷昌弘・田中茂範. 1996. 『コトバの意味づけ論：日常言語の生の営み』東京：紀伊國屋書店.
- Hagoort, P. 2005. “On Broca, Brain, and Binding: A New Framework.” *Trends in Cognitive Sciences*, 9(9), 416-423.
- Hillson, T. R. and R. A. Martin. 1994. “What’s So Funny about That? The Domains-interaction Approach as a Model of Incongruity and Resolution in Humor.” *Motivation and Emotion*, 18(1), 1-29.
- Hobbes, T. 1840. “Human Nature.” In W. Molesworth (ed.), *The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury* (Vol. 4). London: Bohn.
- Hurley, M. M., D. C. Dennett, and R. B. Adams. 2011. *Inside Jokes: Using Humor to Reverse-engineer the Mind*. Cambridge: The MIT Press.
- 河合隼雄・南伸坊. 2008. 「第二章ユングの高笑い」『人の心がつくりだすもの』、41-68、東京：大和書房.
- Levy, D. A., P. J. Bayley, and L. R. Squire. 2004. “The Anatomy of Semantic Knowledge: Medial vs. Lateral Temporal Lobe.” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 101(17), 6710-6715.
- Long, D. L. and A. C. Graesser. 1988. “Wit and Humor in Discourse Processing.” *Discourse Processes*, 11(1), 35-60.
- Martin, R. A. 2007. *The Psychology of Humor: An Integrative Approach*. London: Elsevier Academic Press.
- Mio, J. S. and A. C. Graesser. 1991. “Humor, Language, and Metaphor.” *Metaphor and Symbolic Activity*, 6(2), 87-102.
- Nakamura, T., T. Matsui, A. Utsumi, M. Yamazaki, K. Makita, T. Harada, H.C. Tanabe, and N. Sadato. 2018. “The Role of the Amygdala in Incongruity Resolution: The Case of

- Humor Comprehension.” *Social Neuroscience*, 13(5), 553–565.
- Nerhardt, G. 1970. “Humor and Inclination to Laugh: Emotional Reactions to Stimuli of Different Divergence from a Range of Expectancy.” *Scandinavian Journal of Psychology*, 11(3), 185–195.
- Nerhardt, G. 1976. “Incongruity and Funniness: Towards a New Descriptive Model.” In A. J. Chapman and H. C. Foot (eds.), *Humor and Laughter: Theory, Research, and Applications*, 55–62. London: John Wiley and Sons.
- Pessoa, L. and R. Adolphs. 2010. “Emotion Processing and the Amygdala: From a ‘Low Road’ to ‘Many Roads’ of Evaluating Biological Significance.” *Nature Reviews Neuroscience*, 11(11), 773–783.
- Sander, D., J. Grafman, and T. Zalla. 2003. “The Human Amygdala: An Evolved System for Relevance Detection.” *Reviews in the Neurosciences*, 14(4), 303–316.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition (2nd Ed.)*. Oxford: Blackwell.
- Suls, J. M. 1972. “A Two-stage Model for the Appreciation of Jokes and Cartoons: An Information-processing Analysis.” In Goldstein, J. H., and P. E. McGhee, (eds.), *The Psychology of Humor: Theoretical Perspectives and Empirical Issues*, 81–100. New York: Academic Press.
- Spencer, H. 1859. “The Physiology of Laughter.” *Macmillan’s Magazine*, 1, 395–402.
- 田中茂範・深谷昌弘. 1998. 『意味づけ論の展開：情況編成・コトバ・会話』東京：紀伊國屋書店.
- 谷泰. 2004. 『笑いの本地、笑いの本願：無知の知のコミュニケーション』東京：以文社.
- Thompson-Schill, S. L., M. D’Esposito, and I. P. Kan. 1999. “Effects of Repetition and Competition on Activity in Left Prefrontal Cortex during Word Generation.” *Neuron*, 23(3), 513–522.
- Uchiyama, H. T., D. N. Saito, H. C. Tanabe, T. Harada, A. Seki, K. Ohno, T. Koeda, and N. Sadato. 2012. “Distinction between the Literal and Intended Meanings of Sentences: A Functional Magnetic Resonance Imaging Study of Metaphor and Sarcasm.” *Cortex*, 48(5), 563–583.
- Vincent, J. L., A. Z. Snyder, M. D. Fox, B. J. Shannon, J. R. Andrews, M. E. Raichle, and R. L. Buckner, 2006. “Coherent Spontaneous Activity Identifies a Hippocampal-parietal Memory Network.” *Journal of Neurophysiology*, 96(6), 3517–3531.
- Vrticka, P., J. M. Black, and A. L. Reiss. 2013. “The Neural Basis of Humour Processing.” *Nature Reviews Neuroscience*, 14(12), 860–868.
- Whalen, P. J. and E. A. Phelps. 2009. *The Human Amygdala*. New York: The Guilford Press.
- Wyer, R. S. and J. E. Collins. 1992. “A Theory of Humor Elicitation.” *Psychological Review*, 99(4), 663–688.